様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０１９６

研究課題名（和文）人形浄瑠璃の操り方の変遷に関する研究―江戸系鉄砲ざしの検証と再現―

研究課題名（英文）Changes in the Method of Puppet Manipulation in the Ningyo Joruri Puppet Theater -Verification and Rproduction of the Teppouzashi-

研究代表者
大谷津　早苗（OYATSU, Sanae）

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：４０２５５８９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：本課題研究は、うなづき構造の史的発展過程において現在の文楽の前段階に位置付けられる鉄砲ざしの操り方を検証し、文楽の高度な人形操作への発展過程について考察を行うことを目的とする。鉄砲ざしの事例としては、江戸系といわれる神奈川県の相模人形芝居五座を取り上げ、五座のかつての江戸系鉄砲ざしを知る伝承者への聞取り調査、用具類の調査を行った。調査結果をもとに江戸系鉄砲ざしのかしらを復刻するとともに、そのかしらを用いて江戸系鉄砲ざしの遣い方を再現し、映像資料を作成した(DVD,約20分)。製作したDVDは関係各所へ提供した。

研究成果の概要（英文）：　This challenging seeks as its object to validate how the manipulation of the teppouzashi is positioned in early-stage Bunraku and the historical development of the unazuki structure and considers how this development process contributed to the advanced puppet operation techniques of Bunraku. In the case of teppouzashi, the 5 seat Sagami puppet plays of Kanagawa Prefecture which are said to be of the Edo system were studied via interviews and other survey methods. The survey results produeced data which allowed the reproduction of the Edo system teppouzashi head and how it was manipulated, and video material in the form of a 20 minute DVD was produced detailing this procedure.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：民俗学　国文学　芸術諸学　文化史　民俗芸能　伝統文化　人形浄瑠璃　文楽

１．研究開始当初の背景

（１）着想に至った経緯

本課題研究に入る以前に科研費の採択を受け、「人形浄瑠璃の発生と展開に関する研究－地方の人形浄瑠璃のかしらを資料として－」(平成 10～17 年)いう課題研究に取り組んだ。

この課題研究では、まずかしらの全国調査を行い、全国約 180 カ所、4700 点余りのかしらを調査し、データを収集、その上で主に人形表現上重要な意味を持つうなづき構造の発展過程に関する考察を行った。その結果、うなづき形式は「エンバ棒式」から「小猿式」へ、そしてその次の「引栓式」へという史的発展段階があり、この段階にしたがって人形表現は大きく荒々しい動きから写実的で繊細な方向へと展開し、「引栓式」の文楽人形に至ってはまるで人間のようなリアルな表現を完成する、という仮説を提示した。本来は単純な仕組みであったうなづきを人形表現の根本として芸術的方向へと発展させたところに日本文化の特色を物語る独自性があると考えている。

（２）研究成果の発展

先の課題研究後には新たな問題も残った。その一つが具体的な操り方の問題である。先の課題研究では、うなづき構造の史的発展段階を解明することで、素朴・単純な表現から写実的・芸術的な方向へ、という人形表現の史的変遷を示すことはできたが、具体的な操り方の変遷に関しては不明であった。「エンバ棒式」から「小猿式」へ、そしてその次の「引栓式」へとうなづき構造の変化に伴って、操り方にも変化があったはずだが実際の操り方の変遷はわかっていない。

先の課題研究の次に操り方という視点から、操り方の変遷に関する研究の必要性を感じた次第である。

素朴・単純な表現から写実的・芸術的な方向へ、という人形表現の史的変遷の一方に、どのような操り方の発展段階があったのか、実際的な操り方の発展過程の解明に取り組みたい。

操り方の発展段階がうなづき構造の発展段階に沿うならば、「エンバ棒式」から「小猿式」へ、そしてその次の「引栓式」へという段階において操り方もそれぞれ段階を経て変化していったと考えられるが、本課題研究では「小猿式」から「引栓式」への過程における操り方の変遷について考察する。

具体的には、「小猿式」の操り方に鉄砲ざし(通称)と呼ばれる操り方がある。この鉄砲ざしを検証し、文楽の「引栓式」への変化の過程を考察したい。

（３）本研究に関する国内・国外の研究動向及び位置付け

人形浄瑠璃の操り方に関する研究は国内外ともにあまり行われてこなかった分野である。人形浄瑠璃研究は今まで文献中心におこなわれており、演技演出、操り方等は本来文献に書き残されにくいものなので、あまり進まなかったものと思われる。

本研究では、伝承されてきたかしらと操り方という民俗資料を用いて考察を行う。民俗学的な考察を行うことで、新たな局面を切り開く可能性を有すると考える。

２．研究の目的

本課題研究は、素朴・単純な表現から写実的・芸術的な方向へ、という人形表現の史的変遷の一方に、どのような操り方の発展段階があったのか、実際的な操り方の発展過程の解明を目的とする。

操り方の発展段階がうなづき構造の発展段階に沿うならば、「エンバ棒式」から「小猿式」へ、そしてその次の「引栓式」へという段階において操り方もそれぞれ段階を経て変化していったと考えられるが、本課題研究では「小猿式」から「引栓式」への過程における操り方の変遷について考察する。

具体的には、「小猿式」の操り方に鉄砲ざし(通称)と呼ばれる操り方がある。この鉄砲ざしを検証し、文楽の「引栓式」への変化の過程を考察したい。

３．研究の方法

（１）鉄砲ざしの伝承資料

鉄砲ざしは全国に分布するが、かしらのうなづき構造によって江戸系(小猿式)、阿波淡路系(小猿式の変形であるブラリ式)の二系に分類できる。本研究では江戸系鉄砲ざしを取り上げ、まず、江戸系鉄砲ざしの操り方に関する資料収集を行う。

本研究において、江戸系鉄砲ざしの資料として取り上げるのは、神奈川県相模地方に伝承されている相模人形芝居五座(厚木市長谷座・林座、小田原市下中座、平塚市前鳥座、南足柄市足柄座)である。

長谷座、林座、下中座は国指定の重要無形民俗文化財で、鉄砲ざしを伝承していることが指定理由の一つである。前鳥座、足柄座もかつて中断があったものの同様の理由で神奈川県の無形民俗文化財に指定されている。取り上げる事例としては適していると思われる。

（２）聞取り調査

まず、鉄砲ざしを知ると思われる各座の古い伝承者の方(引退した方も)に聞取り調査を行い、鉄砲ざしの操り方に関する情報収集を行う。足柄座、前鳥座は実施済なので当該期間には、長谷座、林座、下中座の三座について調査を行う。

鉄砲ざしは昭和初期、文楽に比べて劣った見苦しい操り方と評され、矯正されてきた(文楽に近づいてきた)歴史を持つ。よって、鉄砲ざしを知る人はすでに少なく、現在では鉄砲ざしがよく分からなくなっている。

鉄砲ざしの操り方と併せて、鉄砲ざしで操っていた時期、かつての上演の機会や上演の場所、上演時間、座の組織など操り方をめぐ

る周辺の状況なども聞取る。
（３）資料調査
　かしらや台本、用具類の調査を行う。特に鉄砲ざしのかしらに注目し調査を行う。収集したデータをもとに鉄砲ざしのかしらの特徴を整理する。この場合、当該期間以前の調査データも加え、整理する。
（４）データ整理
　聞取り調査をもとに鉄砲ざしの操り方の特徴を整理し、鉄砲ざしの検証を行う。加えて、鉄砲ざしで操っていた頃の各座の聞き取った内容を整理する。
（５）かしらの復刻
　（４）のデータをもとに鉄砲ざしのかしらを復刻する。
(６)鉄砲ざしの検証・実演
　復刻した鉄砲ざしのかしらを用いて、鉄砲ざしの操り方を実演し、検証を行う。実演は下中座の協力による。
　実演による検証は、いくつかの型とそれを用いた演目の一場面、今回は「絵本太功記十段目」尼ケ崎の段の松木登りの場面を鉄砲ざしの操り方で演じ、鉄砲ざしの操り方の再現を試みる。また、鉄砲ざしではない操り方でも同じ型・同じ場面を実演し比較を行う。
(７)資料映像製作
　かしら及び、これらの検証作業は鉄砲ざしの資料として映像に記録する。

４．研究成果
　本課題研究中に、長谷座、林座、下中座、前鳥座の、鉄砲ざしを知る伝承者(引退した方を含む)の方の聞取り調査、新出の長谷座の台本調査と鉄砲ざしのかしらの復刻等を行ってきたが、以下、その成果をもとに行った鉄砲ざしの操り方の検証と実演について報告する。この内容は映像資料「江戸系鉄砲ざしの検証と再現」(DVD、約 20 分)に収録した。
(１)はじめに
　鉄砲ざしとは文楽とは違った三人遣いの操法である。左手で人形の胴串を持ち、腕を水平に伸ばし、かしらをやや下に傾ける。
　その姿が鉄砲をかまえに似るのでその名がある。鉄砲ざしは、江戸系人形と淡路系人形の特徴であった。しかし、現代において鉄砲ざしは姿を消しつつある。
　本研究は江戸系鉄砲ざしを伝承してきた相模人形芝居五座の聞書きをもとに、下中座の協力を得て、江戸系鉄砲ざしの検証と再現を試みたものである。
(２)鉄砲ざしのかしらの特徴
　鉄砲ざしのかしらは、文楽のように腕を曲げて構えると顔がやや上を向く。鉄砲ざしのかしらの頷き操作部分の違いによって江戸系(小猿)と淡路系(ブラリ)に分けられる。
　次に、相模人形芝居の代表的な演目の一つである「絵本太功記十段目」尼崎の段の武智光秀を取り上げ、比較する。
　　①　文楽の光秀(大谷津研究室所蔵)
　頷きが引栓式で、胴串を垂直にして引栓を引くと顔が正面を向く。
　　②　江戸系鉄砲ざしの光秀(復刻)
　下中座で平成８年まで使用していた光秀のかしらを模刻した(写真１)。大きさは定型の４寸より一割程度小さめ、表情は文楽の文七よりややきつい。額の三日月の傷は描かれていない。髪型も文楽と相違がある。
　頷きは小猿式で、胴串を垂直にして小猿を引くと顔がやや上を向く(約 10 度、写真２、５)。上を向くのが鉄砲ざしのかしらである。

写真１

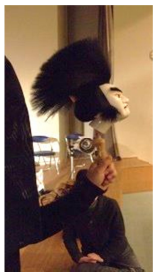
写真２

　　③　参考資料：淡路系鉄砲ざしの光秀(大谷津研究室所蔵)
　頷きがブラリ式で、胴串を垂直にしてブラリを引くと顔がやや上を向く。これも上を向くので鉄砲ざしのかしらである。
(３)鉄砲ざしの操法
　鉄砲ざしの基本操法をあげる。用いるかしらは、鉄砲ざしのかしらの特徴がより明確である、長野県飯田市の今田人形座の男のかしらを復元したものである。顔の角度が約 20～25 度ある(大谷津研究室所蔵、写真３)。
　このかしらを遣う場合、腕はほぼ水平に伸ばす(写真４)。

写真３

写真４

(４)現行の江戸系鉄砲ざしの操法(下中座)
　現在下中座では、今の上演環境に合わせて、鉄砲ざし(写真６、８)を文楽風に矯正して遣っている。腕を曲げ、手首も曲げてかしらの顔が正面を向くように遣う(写真７、９)。

写真５

写真６

写真７

写真８

写真９

(５)「絵本太功記十段目」尼崎の段松木登りの場面における三つの型
「絵本太功記十段目」尼崎の段松木登りの場面における主要な三つの型、大六法(写真１０、１１)、団七走り、立ち身を鉄砲ざしとそうでないパターンを両方演じてもらい、比較を行った。
　鉄砲ざしかしらを持つ手が伸び、主遣いと人形の間の角度が開いていることがわかる(写真１２)。
　また、鉄砲ざしでは人形の上半身が前傾し、人形の顔は下を向く。
　観客の位置を下に想定すると、特にキマルとき、観客は人形と目線が合い、人形が近づく感じがするのではないか。

写真１０

写真１１

写真１２

(６)まとめ
　以上のように、現在相模人形芝居にみられる鉄砲ざしは腕をやや前に傾けて遣う、もしくは文楽風に矯正して遣うものであって、江戸系人形の特徴といわれた腕を水平に伸ばした操法は、現在姿を消してしまった一段階前の操法と考えられる。
　全国に多数存在する鉄砲ざしのかしらが一様ではないように、鉄砲ざしの操法にも幾通りかの操法がある。そこには歴史的段階が想定されるのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔その他〕
「江戸系鉄砲ざしの検証と再現」（DVD,約 20 分，2014 年）

６．研究組織

(1)研究代表者
大谷津早苗（OYATSU　Sanae）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：40255899

(2)研究分担者
なし